THE NEW GATE

ザ・ニュー・ゲート

風波しのぎ
Kazanami Shinogi

15.魂の還る場所

Illustration：晩杯あきら

「THE NEW GATE」世界の用語について

●ステータス

LV：	レベル
HP：	ヒットポイント
MP：	マジックポイント
STR：	力
VIT：	体力
DEX：	器用さ
AGI：	敏捷性
INT：	知力
LUC：	運

●距離・重さ

1セメル=1cm
1メル=1m
1ケメル=1km
1グム=1g
1ケグム=1kg

●通貨

ジュール（J）　：　500年後のゲーム世界で広く流通している通貨。

ジェイル（G）　：　ゲーム時代の通貨。ジュールの10億倍以上の価値がある。

ジュール銅貨　＝　100J

ジュール銀貨　＝　ジュール銅貨100枚　＝　10,000J

ジュール金貨　＝　ジュール銀貨100枚　＝　1,000,000J

ジュール白金貨　＝　ジュール金貨100枚　＝　100,000,000J

●六天のギルドハウス

一式怪工房デミエデン（通称:スタジオ）……『黒の鍛冶師』シン担当

二式強襲艦セルシュトース（通称:シップ）……『白の料理人』クック担当

三式駆動基地ミラルトレア（通称:ベース）……『金の商人』レード担当

四式樹林殿パルミラック（通称:シュライン）……『青の奇術士』カイン担当

五式惑乱園ローメヌン（通称:ガーデン）……『赤の錬金術師』ヘカテー担当

六式天空城ラシュガム（通称:キャッスル）……『銀の召喚士』カシミア担当

目次　Contents

用語解説 …… 003
登場人物紹介 …… 004
ワールドマップ …… 006

Chapter1　エルフの園 …… 007
Chapter2　攫われた巫女 …… 091
Chapter3　瘴魔迷宮 …… 155
Chapter4　世界を滅ぼす獣 …… 215
Side Story　運命の出会い …… 259

ステータス紹介 …… 281

主な登場人物
Main Characters

シュバイド・エトラック

521歳。ハイドラグニル。
ゲーム時代の
シンのサポートキャラ。
竜皇国キルモントの
初代国王。

シュニー・ライザー

521歳。ハイエルフ。
ゲーム時代のシンの
サポートキャラ。
500年間シンを待ち続けた。

シン

本編の主人公。
21歳。ハイヒューマン。
オンラインゲームで
名を馳せた最強プレイヤー。
デスゲームクリア後、500年
後のゲーム世界に飛ばされる。

ユズハ

エレメントテイル。
シンに助けられたモンスター。
基本は子狐の姿だが、
人型にも変身可能。

ティエラ・ルーセント

157歳。エルフ。
強力な呪いの名残で
髪の大部分が黒い。
故郷を追放され、
シュニーに保護された。

カゲロウ

グルファジオ・ヤーデ。
ティエラと契約するモンスター。
真の姿は狼のような巨大な獣。

Chapter 1 エルフの園

THE NEW GATE

エルクント魔術学院において、罪源の悪魔の1柱、強欲のアワリティアと対峙したシン。
戦いのなかで、同じく罪源の悪魔である色欲のルクスリアが悪魔と対をなす天使に変化。
その力を借りて、シンは勝利を収めたのだった――。

侵攻を退けたシンは、サポートキャラである相棒のシュニーに連絡を取った。
ルクスリアの力によって、召喚陣から現れたモンスターこそ消えたものの、建物の損壊や人的被害は大きい。
シュニーも全体の状況は把握していないようだったが、モンスターが消えたことで、怪我人の治療や救助も始まったらしい。
「俺は街に行くつもりだけど、ルクスリアはどうする？」
「そうね。私は魔術学院のシェルターの転移先に向かって、ヒラミーと合流するわ。メッセージで外はもう安全だと知らせたから、シェルターから出てくると思うし。でもその前に、シンにお願いがあるんだけど、いいかしら？」
「内容次第だ」
また穿いてないだの、つけてないだの言われても困るので、シンはあらかじめ予防線を張っておいた。
「そんなに警戒しないで。ちょっと服を借りたいのよ。ほら、今の私、この帯っていうか布っていうか、まあそんな感じのものを体に巻いてるだけじゃない？　これは私の力が形を成したみたいなんだけど、このままうろつくのはさすがにまずいと思うのよね」
そう言って、肩をすくめてみせるルクスリア。
シンが注視してみると、『天使の帯布』と出た。素材アイテム扱いのようだ。
『天使の帯布』は、ルクスリアの胸から太ももあたりまでを隠している。
体に沿ってぴったり巻きついているので、体の凹凸がかなりはっきりと出ていた。
巻きついた部分以外に、腕にも帯布は展開している。こちらはゆったりとしたもので、腕の周りに浮いていた。
戦闘が終わったからか、背中にあった光の輪やそこから伸びていた羽らしきものは消えている。
「まあ、そのくらいなら協力するか。とりあえず、靴と服」
シンはアイテムボックスを操作し、まずは適当な衣服を取り出す。これといった特殊効果のない、スキルレベルを上げるために作ったものだ。
ルクスリアの穿いてない、つけてない発言があったので、もし入れっぱなしにしていたら程度の気持ちでアイテムボックス内でソートをかけてみる。
すると、明らかに忘れていたのだろうものがいくつか残っていた。

「あとは……下着か」
「……あら？　今、下着って聞こえたような」
ルクスリアがばっちり聞いていたようだ。
「ねぇ、シン？　なんであなたが女性ものの下着を、さも当然のように持っているのかしら？　まさか、自分で作った好みの下着をシュニーちゃんに――」
カード状態のそれを見て、ルクスリアはシンに問いかけてくる。話している途中で、まさかといった表情になった。
「違うわ!!　生産系のスキルを上げるときに作ったものが、アイテムボックスに入れっぱなしになってただけだ。まだ駆け出しのころのやつだから、サイズ自動調節機能もついてないしな」
容量が無駄に多いとまで言われたアイテムボックス。それ故に、最初のころに作ったものがアイテムボックスの奥底で忘れられていたりするのだ。
シンのような生産職のプレイヤーではよくあることで、他にもまだガラクタとしか言えないようなものも残っている。
下着についても、シンも残っているとは思っていなかったくらいだ。
「ふ～ん、へぇ～」
「なんだかひどい誤解を受けている気がする」
あからさまに疑っていますという風情のルクスリアに、シンもなんと言うべきか迷う。

男性であるシンのアイテムボックスから女性ものの下着が出てきたのだ。何を言っても言い訳に聞こえるのは間違いない。
「なんでもないわ。じゃあさっそく着替えるわね」
ルクスリアがそう言うと、体に巻きついていた帯布がすっと消える。
いきなりのことでシンはルクスリアが何をしたのかすぐには理解できなかった。目の前にあるルクスリアの裸体を見て数秒固まる。
そして、何が起こっているか理解すると、ばっと体ごとルクスリアからそらした。
「そのまま見てもいいのよ？」
「勘弁してくれ……」
元が色欲の悪魔だけに、天使となってもその美しさと悩ましいボディラインは健在だ。
これが悪魔のままなら過剰な色香を感じたのだろうが、天使になったせいか、それほど強い色香は伝わってこなかった。
裸婦像のような芸術作品を見ている感覚に近いかもしれない。
「ねぇ、シン。わざわざ用意してもらっておいてなんだけど、サイズ自動調整機能をつけてもらっていいかしら」
「……カードだけくれ」
理由はお察しだ。一応、持っていた中で一番大きいサイズを渡したのだが、それでもダメだった

らしい。
同じような背丈の女性の平均値をはるかに越えているそれを知っているシンとしては、やっぱりかという感想しかない。
ルクスリアを見ずにカードだけ受け取り、シンはささっとサイズ自動調整機能を付与した。今まさにルクスリアはつけていないのだ。
「うん、ぴったり。話には聞いていたけれど、便利よね。いつも特注だったから、助かるわ」
背後から聞こえる衣擦れの音がやんだので、シンが着替え終わったかと声をかけようとすると、背中に誰かが抱きついてきた。
当然、相手はルクスリアだ。体を密着させているので、シンの背中で何か柔らかいものが押し潰されている。
「おい」
「ふふっ、ちょっとしたお礼よ。このくらいならいいでしょう？」
背中の感触が離れたところでシンが振り返ると、いたずらが成功したような顔で、ルクスリアが笑っていた。
白いセーターと黒いロングスカート姿のルクスリアは、仕草のせいで少しだけ幼く見える。
ただし、次の瞬間には唇に人差し指を当てて妖艶な雰囲気を出し始めたせいで、どこまで本気なのかシンにはわからなくなった。

「ほんとはキスをしてあげたいところだけれど、シュニーちゃんに怒られそうだからやめておくわ」
「はぁ、どちらかといえば俺がやばいからやめてくれ」
確実にシュニーが不機嫌になる案件だ。シンとしては、そんな爆弾を投下されてはたまらない。
シェルターからの転移先に向かうルクスリアと別れ、シンは街に向かう。
アワリティアによって破壊された外壁から街中へと進むと、モンスターのもたらした破壊の跡がよくわかった。
全壊、半壊したものも多いが、どちらかと言えば入口付近だとか屋根の一部だとか、ちょっとした損傷のほうが多いように見える。
これは、誰かがモンスターと戦ったのが原因だろう。
シュニーから聞いていたとおり、人々の表情に悲愴感はなかった。モンスターが消滅したことで危機は去ったと理解しているようだ。
「俺も、できる限り手伝うかな」
マップを見て【気配察知】を使うと、倒壊した建物の中にまだ取り残されている人たちがいるのがわかる。まずはその救助からと、シンは一番近い場所に向かった。
「……2人か」
建物の中には反応がふたつある。

「おいあんた、中に人がいるかわかるのか？」
近くにいた男が、シンのつぶやきが聞こえたのか声をかけてくる。レザーアーマーを身につけているので、きっと冒険者だろう。
「気配を探る技術の応用でな。まずは建物が崩れても大丈夫なように、魔術で安全を確保する。念のため、少し離れていてくれ」
シンがそう言うと、男はうなずいて周りにいた男たちにも離れるよう促した。
この一帯で救助活動をしている人たちのリーダーらしい。
シンはまず【透視（スルーサイト）】と【分析（アナライズ）】を併用して、取り残された人がどんな状態かを確認する。
運が良かったのか、柱と柱の隙間（すきま）に出来た空間にいるようだ。
シンは土術系魔術スキル【アース・ウォール】を発動し、閉じ込められている2人を覆（おお）うように展開した。
「よし、OKだ。中にいる人を土壁で覆った。ちょっとやそっとじゃ壊れないから、とっとと瓦礫（がれき）を撤去しよう」
シンの言葉を受けて、男たちが瓦礫をどかし始める。
シンもその中に加わり、運ぶのに時間のかかりそうな大きな瓦礫をひょいひょい持ち上げては別の場所に積み上げていった。
人命救助に自重（じちょう）は不要と、壁の一部がそのまま残っていようが丸太のような柱が折れて転がっていようがお構いなしに持ち上げていく。
シンがひとつ瓦礫を撤去するたびに、ズンッやドンッといった音が響いた。
「なんじゃありゃ……」
「すんげぇ……」
自身の数倍はある瓦礫を片手で持ち上げるシンを見て、同じように瓦礫を撤去していた男たちが唖然（あぜん）としていた。
「お前ら、手ぇ止めてる暇なんざねぇぞ！　でかいのはあの兄ちゃんに任せて、細かいもんを動かせ！」
一足早く我に返ったリーダー格の男が棒立ちの男たちに発破（はっぱ）をかける。他の男たちもはっと我に返るとすぐに動き始めた。
大きな瓦礫をどかした後は、シンが要救助者のいる場所をピンポイントで指示し、しばらくすると、土で出来た球体が姿を現す。
固すぎて男たちでは土を壊せないので、シンが穴を開けた。
中には身を寄せ合っている親子の姿があった。
男たちの手で引き上げられた母と娘は、何が起こったのかわからないという表情だ。
「後は任せた。俺は他の場所を見てくる」
「おう、こっちは任せてくれ。――頼んだぜ」

その言葉にシンはうなずき、すぐに他の生き埋めになっている人のところへと急いだ。

†

「ずいぶんと、活躍してくれたようだな。エルクントを代表し、礼を言う」

アワリティアの襲撃から3日後、シンは王城にてクルンジード王と面会していた。シュニーは変装し、「ユキ」としてシンに従っている。

ルクスリアから事情を聞いたヒラミーによって王城へ連絡が行き、アワリティアが討伐されたことはその日のうちにクルンジード王や上層部の者たちに伝わった。

それなのに謁見が3日後となったのは、連絡に来た騎士に、シンが救助を優先したいと伝えたからだ。

王との謁見を先延ばしにすることは、通常なら無礼極まりない。しかし今回は理由が理由だけに、問題にはならなかった。

シンのところに来た騎士も、理由を聞いて自分も救助に向かいたいと言ったくらいである。先のアワリティア襲撃で、自分たちがほとんど何もできなかったことを悔いているようだった。

「いえ、こちらも後手に回ることが多かったですし、今回の被害が少なくてすんだのは、単に運が良かっただけです。大口を叩いておいてあまり役に立てず、申し訳ないくらいで」

人質を取られてほとんど何もできず、居心地の悪いシンだった。

「シン殿が役に立てなかったのなら、我々は役立たずどころではないのですがね……」

「そうだな。シン殿が提供してくれた武器がなかったら、今ごろ私たちは、生きてこの場にはいなかっただろう」

苦笑いのシンに対し、ともに戦ったエルクントの騎士ファガルとシーリーンが、同じく居心地の悪そうな顔で言う。上司であるナムサールが操られていたからとはいえ、たかがアワリティアの分身に苦戦したことを気にしているようだ。

アワリティアに操られていたナムサールは、心身ともにかなり消耗していて、まだ意識が戻らないらしい。

「はいはい、そこまで！　結果論だけれど、被害が少なかったことは喜んでいいでしょう？　みんな手なんて抜いてなかったんだから、反省するところだけ反省して、あとはうじうじ引きずるなんてダメよ」

不甲斐なかったところばかり挙げるシンたちの会話に、ルクスリアが割り込んできた。こちらは呆れ顔だ。

「そうですね。次はもっとうまくやれるように精進しましょう」

「うむ、ルクスリア殿やユキ殿の言うとおりだな。今後は、悪魔やモンスターについてより多くの情報を集め、対処法を考えるとしよう。だが、今はまずシン殿たちへの報酬の話が先だ」

クルンジード王はひとつうなずいて話題を変えた。ただ、その内容はシンたちが予想していたものとは違った。

「ドロップ品がいただけるなら、それで十分なのですが」

今となっては、欲しいと思ってもほぼ手に入らないアイテムだ。報酬としては申し分ないとシンは考えていた。

「それは承知している。ただ、爵位と領地を与えてはどうかという声もあってな。功績が功績だ。無理もない話なのだが」

「最初にお断りしたと思いますが？」

冒険者がその活躍から貴族へと取り立てられる。

確かに、ない話ではない。シンはそういった成り上がり系の創作物も読んだことがあったが、面倒事のほうが多い印象しかなかった。

ギルドホームの捜索や聖地の調査など、まだやらなければならないことは多いのだ。宮仕えなどしている暇はない。無理にと言うならば、相応の対処をすることになる。

「無論承知している。だが、本人の口から聞かぬと納得せん者もいてな」

シンたちと会う前に報酬の件について話し合いがあったようで、ファガルやシーリーンも苦笑していた。

強大な力を持つ者を囲い込んでしまいたい。そう考える者はどこにでもいるようだ。

「シンとユキちゃんの力は魅力的だものね。ちなみに私は、防衛以外に手は貸さないわよ？」

「無論だ。天使の力を侵略に使うなど、どんなしっぺ返しがあるかわかったものではない。できる限り、その情報は隠匿するつもりだ」

ルクスリアが悪魔から天使になったことも、クルンジード王たちには伝えてあった。悪魔であるが故に問題だったことも、天使ならば話が変わるからだ。

疑う者もいたが、ルクスリアが天使の羽――光の輪から出る8枚の模様――を見せると、誰もが驚きとともに納得した。

羽を展開しているルクスリアは神聖なオーラを発しているのだ。

シンとシュニーも、ルクスリアが人々に危害を加えるとはもう思っていない。

ただし性格は変わっていないので、そういう意味での危険度が同じなのは残念だった。

クルンジード王たちのほうは、ルクスリアの放つ神聖なオーラに気圧されている。

シンたちはさほど気にしていないが、この世界の住民には神々しく映るらしい。

【THE NEW GATE】の世界において、伝承という形でしか存在しない天使が目の前にいる。まさに伝説の存在が顕現したと言ってもいい。

純粋に力で敵わないのはもちろん、天使を利用するなど恐れ多いといった雰囲気だった。これについては、上層部の中でも反対意見は出なかったらしい。

「賢明な判断だと思います。天使の存在を公にすれば、他国とも今までどおりの関係ではいられ

ないでしょうし」
「私も学院の仕事に支障が出ると困るから、そのほうが助かるわね」
シュニーとルクスリアの発言に、シンは気にしている内容の規模が全然違うなと苦笑した。ルクスリアの正体が公になれば、保健室で生徒の世話などできるはずがない。
「話はこんなところですかね？」
「うむ、わざわざ足を運んでもらってすまぬな。ここ数日は住民の救助にも尽力してくれたと聞いている。改めて礼を言う」
クルンジード王が頭を下げる。
王族が軽々しく頭を下げるなど、と周囲が慌てそうなものだがファガルもシーリーンも落ち着いている。王が頭を下げるだけのことを、シンとシュニーは成し遂げたのだ。

†

王城を出た後、シンはシュニー、ルクスリアとともに、魔術学院に向かった。
街の被害も多かったが、悪魔同士の戦いの舞台となった学院は、一部とはいえかなり無残なことになっていた。
「時間はあるから、がっつり直せるな」

門をくぐり、ヒラミーのもとへと向かう途中、ぼろぼろになった校舎を見ながらシンが言う。
鍛冶師であるシンが建物の修復に自信があるのには理由がある。
『六天』のメンバーは、自分の得意とするものの一部を、他のメンバーと共有していた。シンならば鍛冶スキルや彫金スキルを、仲間のレードやクックに教えている。
そして、シンはといえば、マイホームである月の祠を作る際に『六天』の1人『青の奇術士』ことカインにいろいろと指導を受けている。
そのおかげで、建築スキルこそ高くないが応用力はついていた。建築家には想像力も必要と、ゲームであることをいいことに、おかしな建物もかなり作っている。
「シンがすごいってことはわかってるつもりだったけれど、なんていうか、万能よね」
「そうでもない。ある程度は鍛えたってだけで、本職から見れば全然ダメだ。鍛冶関係以外でものになったのは、錬金術と建築関係のスキルくらいだろうな」
建築はスキルレベルⅣ。錬金術はスキルレベルX。鍛冶に必要な薬品もあり錬金術が飛びぬけているが、それだけだ。
『赤の錬金術師』と呼ばれるヘカテーと同じものが作れるかと言われれば、答えはNO。ただ錬金術のレベルが高ければいいというものではない。
反対に商業関係のスキルや農業、畜産などのスキルはほとんどⅠかⅡで、取っただけというレベルだ。

ユズハをパートナーとしたことで調教系のスキルは多少ましになったが、それでもこの世界で調教師を本職として活動している者と比べると、シンは劣っている。

「それだけできること自体が、もう十分すごいのだけれど。まあ、あなたが活動していたころを基準にしたら、そうなんでしょうね」

ルクスリアは『栄華の落日』前、ゲーム時代を知っているのでシンの自己評価に一応納得した。

「こちらとしては願ってもないことですが、いいんですか？　あまり力を見せると、目立ちますよ？」

学院長室でシンの提案を聞いたヒラミーは、複雑な顔でそう言った。

戦闘力が高いというだけでも目をつけられるには十分。そこに生産系にも強いという情報が加われば、接触してくる者が増えるのは間違いない。事情があったとはいえ、自分たちに関わったことでシンが人前で必要以上に力を使っているとヒラミーは思っているようだ。

「そこはさすがAランク冒険者と思ってもらうさ。それに、目立つのはもう今さらって感じだし」

シンはもう、目立つことに関しては仕方がないと割り切っている。

どこかの国を拠点にしているわけではないので、国を出てしまえば連絡を取ることはほぼ不可能なのだ。もし追ってくる者がいようとも、振り切ることはたやすい。

「この際だから、甘えちゃいましょうよ？　その分、しっかりお礼をすればいいんだし」

背後からヒラミーの肩に手を置いてルクスリアは言う。ヒラミーからは見えないが、お礼のとこ

ろで笑みが深まったのをシンは見逃さなかった。

「まて、お前の言うお礼はろくなもんじゃない気がする」

「あら、失礼しちゃうわね」

拗ねたように唇を尖らせるルクスリア。大人の女性という外見のルクスリアがするには少々子供っぽい仕草だが、彼女の魅力をまったく損なっていないのが不思議だ。

しかし、そんなルクスリアに、シンはジト目を向ける。

天使になった今でも、ルクスリアが言うとお礼という言葉に『性的な』という言葉が付随しているように聞こえてしまうのだ。

悪魔ではなくなったのだからもう人の情動からは力を得られないのではとシンは思ったのだが、予想に反してその能力はまだ持っているとルクスリアから返答をもらっている。

「天使に奉仕してもらうなんて、王族だって無理なのに」

「本性知ってるからな。それに、シュニーがいるのに他の女にそっち方面のことなんて頼むかっての」

そう言って、シンは隣にいたシュニーの肩を掴んで抱き寄せる。

ルクスリアの言動に鋭い視線を向けていたシュニーは、突然のことに目を白黒させていた。夫婦となった今でも、シュニーはこういった接触に初々しい反応をするのだ。

「むぅ、妬けちゃうわね。この世界じゃ一夫多妻なんてよくあることなのよ？」

「俺のいたところは一夫一妻だったし、ハーレムなんてフィクションで十分だ。というか、なんでそんなに絡むんだよ？　俺がハイヒューマンだからか？」
　最初は物珍しさからからかわれていると感じていた。しかし、事ここに至ってそれでは説明がつかないような気がしていた。
「ピンチのときに助けてくれた相手に惚れちゃうって、よくあることだと思わない？」
「ぼこぼこにされるのを黙って見てて、最後にちょこっと剣で斬っただけの俺に惚れる要素とかないだろ」
　天使になったきっかけはシンの一撃だったとルクスリアは言っていたが、それとこれとは話が違うだろうとシンは指摘する。
「それも理由のひとつではあるのだけどね。強いて言うなら、私が色欲の悪魔だったから、かしら」
「どういうことだ？」
「あなたがシュニーちゃんと交わるときの強い感情。他の人種とは一線を画すそれに、私は惹かれたんだと思うわ」
　色欲の悪魔だからこそ、それを感じて興味を持った。そして、それはいつの間にか恋とも愛ともいえない奇妙な感情へと変化していったらしい。
「あとは、そうね。私の正体を知っても過剰な反応をしなかったから、とか？　普通、悪魔に触れられるなんて拒否反応が出て当然だし」
「いや、疑問形で言われても」
　シュニーを抱き寄せているのとは反対の手に、ルクスリアはそっと手を這わせる。
　シンはけろっとしているが、相手が一般人なら悲鳴を上げて振り払っているだろう。
　天使に変化したとはいえ、悪魔とは近くにいることすら許容できない存在なのだ。
　選定者でもなく、元プレイヤーでもないクルンジード王がルクスリアと対面して会話をしているが、まさに異例中の異例であった。
　しかしそんなルクスリアも、シンにとっては『倒せる相手』である。厄介な相手ではあるが、過敏な反応をするほどでもなかったのだ。
「仕方ないじゃない。今はもう、きっかけなんてどうでもよくなってるんだもの。自分でも、ここまで執着するなんて少し驚いているのよ？　こんな気持ちになったのは、生まれて初めてなんだもの」
　シンの手を包むルクスリアの手に力が入った。
　悪魔は基本的に相手を翻弄し、弄ぶ。心の隙をつき、欲望を刺激し、相手を惑わせる。そこに、好意などない。
　逆に言えば、好意を持って相手に接し、操るのではなく純粋に自分を思ってくれるようにすることに関してはずぶの素人だった。

「戸惑う気持ちは……まあ、なんだ。まったくわからないわけじゃない。でもそれとこれとは話が別だ」

人で言うところの、初恋を自覚したような状態なのだろうとシンは思う。

そして、そう考えるとルクスリアの言動もまったく理解できないわけでもない。「好き」という気持ちは、自分でわかっていても抑えが利かないときもあるのだ。

とはいえ、ここでうなずくわけにはいかない。シュニーがいつの間にか抱きつくように身を寄せていて、シンとルクスリアの間に体を割り込ませているのだ。

シンの位置からシュニーの表情が見えないのが少し怖い。

「シンよりもシュニーちゃんが難敵ね」

「これ以上は見逃せませんよ？」

笑顔の2人の間で、見えない火花が散っている。シュニーもすでに臨戦態勢だ。

しかし、そこに成り行きを見守っていたヒラミーが割り込む。

「あのぅ……できれば復興の話を、ですね。したいかなぁって……あわわ⁉」

2人の視線がヒラミーに集中する。それだけでヒラミーは数歩後ずさった。

ヒラミーの勇気に、シンは心の中で敬礼した。

「え、なんだこれ……」

そこに、後から到着したマサカドが困惑した声を響かせる。穏やかならざる気配に、「やべぇときに来ちまったか⁉」と表情で語っていた。

「とりあえず、今はヒラミーの言うとおり復興の話をしよう。な？」

シンは2人によってもたらされた間を使って、全力で話題をそらした。

実際、その話をしに来たのであってルクスリアの話のほうが余計なのだ。

「……はぁ、わかったわ。この話はまた今度、ね」

「勘弁してくれ……」

ウインクしてくるルクスリアに、シンは頭が痛くなる思いだった。

どうにか軌道修正はできたので、ルクスリアのことは考えないようにしつつ、校舎の修復についてヒラミーと話をする。

シンのスキルレベルならば、半分瓦礫の校舎も元の形に戻すことが可能だ。この際なので、以前より頑丈にしようという方向に話が進む。

学院はギルドハウスの技術を一部応用したものだが、建物自体はこの世界の水準と変わらないものだった。

「私やマサカドは戦闘系のスキル構成でしたし、素材をなるべくいいものにしていくらか頑丈にするのが精一杯なんですよ」

ゲーム時ならば生産系ギルドに依頼すれば金額次第でモンスターの攻撃でもびくともしないような、要塞のごとき校舎も作れた。

しかし、それは今は望めない。悪魔の戦闘の余波でボロボロになるのは当然だった。
「なるべく強度を上げる方向でやるか。俺もスキルレベルは低いほうだけど、そこはカイン直伝のテクニックでいくらか補えるだろうし」
シンの言うテクニックとは、現実世界の技術をこの世界で使うことを指す。
破られた外壁をシュニーが一時的に塞いだときに使用した、土の網を氷で覆った壁は、現代で言うところの鉄筋コンクリートを参考にしたものだ。
ゲームゆえに、壁と言えば土や金属を固めて板にしたものとプレイヤーの多くは考えていた。
しかしリアルで建築士のカインは、これをやったらどうなるのだろうと思い至り、実際にやってみた。そして、現代の技術が一部だが応用可能とわかったのだ。
生産系スキルをあるがままに使っているだけでは、気づかないことを発見したプレイヤーはカイン以外にもおり、生産者の一部だけがその技術を知っていた。
ちなみにシンも自力で気づいたプレイヤーの1人だ。
鍛冶をするに当たって、せっかく自分の体を動かすのだからと本物の鍛冶師を真似ているうちに出来上がる品の質の違いに気づいた。
「カインさんみたいに、自爆装置だけはつけないでくださいね？」
「つけない、つけない……わざわざあんなものつけるのはカインくらいだから」
自分の作品には、必ずと言っていいほど自爆装置をつけたがったハイヒューマンを知っているヒ

ラミーに、シンはしっかりと否定を返す。
シンも月の祠に自爆装置の取り付けを勧められて断っていた。
自爆装置の作成者はヘカテーで、建物とその内部だけを見事に吹き飛ばす仕様だ。
外部に被害が出ない優れものと豪語していたが、その分威力が集中することになるので巻き込まれるとハイヒューマンでも無事では済まない恐ろしいものだった。
「自爆装置のことは忘れるとして、さっそく作業に取り掛かろうと思うんだが、優先してほしいところはあるか？」
「そうですね……授業はすぐに再開とはいきませんし、まずは校舎の隣に併設された学生寮をお願いします。遠くから来ている生徒に長期の宿暮らしをさせるのはかなりの負担になってしまいますから」
エルクントに留学してくる生徒はそれなりにいるが、一部の裕福な者を除いてほとんどが学生寮暮らしだ。
家賃として多少学費は増えるが、在学中宿に泊まり続けた場合を考えれば、はるかに安価である。
街ではモンスターによって宿も被害を受けているので、トラブルも起きている。生徒のことを思えば、学生寮の修理は急務だろう。
「よし、ならすぐに取り掛かろう。今日中に仕上げて、安心して休めるようにしてやらないとな」
時間が惜しいと、シンは学生寮がある場所へと移動した。

立ち読みサンプル
はここまで

そこにあったのは半壊状態の建物。崩れていない部分も、至るところにひびが入っていていつ崩れてもおかしくない。

「ふむふむ、これなら問題なくいけるな」

スキルの効果で、学生寮の構造図がシンの脳裏に展開された。

建物の材料は珍しいものではない。シンでも十分対処可能なものだ。瓦礫と化した部分も含めて手つかずなので、材料には困らない。

シンは瓦礫に手で触れると、スキルを発動させた。

脳内展開されていた学生寮の構造図が、シンの目の前に実物と同じ寸法で展開しなおされる。

シンが空中で手を振ると、目の前の学生寮と重なるように展開されたそれに瓦礫が液状に変化して吸い込まれていく。

透明な入れ物に水を入れるように、瓦礫は綺麗(きれい)に構造図を満たしていった。

その様は、まるで見えないタクトを振って物体を操っているようだ。

「あとは、ちょちょいと手を加え――」

「シンさん？」

先ほどの自爆装置のことを忘れるはずがなく、作業を見守っていたヒラミーが背後からシンの肩を掴んだ。声音(こわね)だけで、ふざけることを許さない気配が伝わってくる。

「待て待て、妙なことをする気はない。せっかくだから、少し壁の強度を上げるだけだ」